

こぶしの花

2021. 11. 2

書斎での探し物だが、いっこうに進まない。次から次へと“幸運”に巡り合ってしまうからである。今回の幸運は「こぶしの花」というファイルである。ファイルの裏表紙には、こう書かれてある。

平成3年度 こぶしの花 高澤正男様へ 一枚でも読むに耐え得るものがあれば幸いです

3-5 YS

私の憧れの先輩であるYS先生が出していた学級通信のタイトルが「こぶしの花」である。毎号、手書きである。YS先生はどんな方なのか。「こぶしの花」平成4年3月13日（金）学級だより最終第122号を紹介してみる。

夜十一時三十七分、今、ようやくわが五組の「男」と「少女」三十八名全員を書き上げることができた。疲れは感じない。最後の〇子さんを書き終えた時、明日、ひとりひとりの名前を心をこめて呼べると思った。卒業式は、予定通り行われるだろう。もう君たちに言うことは、何もない。「こぶしの花」パートVの終わりである。（中略）

出会いは、全くの偶然である。二つの直線が交わったようなものだ。別れは必ずやってくる。一度交わった二本の直線が、どんどん隔たりを広げていくように、もう全員がそろって会うことはないだろう。それが別れなのだ。二度と会えないつもりで別れればいい。もう見られないと思って見つめればいい。もう聞かれないと思って聞けばいい。

そして、歩き、走り、歌い・・・生きる。

「文は人なり」である。YS先生は、かっこいい。さまになる人である。平成3年度は、YS先生が38歳、私が28歳である。このような素敵な方が、同じ学年で、共に国語の授業を担当しているのである。それは、憧れるだろう。

だが、憧れても同じようにできるわけではない。国語の授業はというと、それこそ雲泥の差である。生徒をはじめ、人前での話もそうだが、書く文章も圧倒的な差である。違いではない。“差”である。

あの頃の私は、自分が10年後にYS先生のレベルに到達できているイメージがもてなかった。今回、改めて「こぶしの花」を読んでみたが、相変わらず圧倒的な差を感じることとなった。内容は、一般的な学級通信とは違う。YS先生のエッセー、随筆、随想である。私で言えば、この「校長室だより」になるだろうか。

「こぶしの花」の真似をするのは容易なことではない。自分のスタイルを追求したほうがよさそうである。憧れを抱きながらも、自分の持ち味を出しながらやっっていこうと思う。